



清談常般石色香

せいだんときものいろ

柳亭種彦
厚田彦作

二

13
3583
2



門へ 13
號 3583
卷 2



常磐色香二之卷 一名本朝奈何天

江戸柳亭種彦 厚田仙果仙果戯作

犬櫻

又あふ同じさまの物語あり中むかへ洛外下岡崎の
むらえつまふ狂歌の判ざり扇團の畫かきかひけき
世ぞかゝる若人ありらるあやしき伏屋をがら板垣
結環らり門をられ所ふ柴の片折戸入を二坪をり

早稲田大学図書館
35.2.2
蔵書

過ぎ頃すぎころをひ食くひ、顔かほて入口いりぐちの戸かどれきさして盆ひら寝ねし申まをの
時ときづらふ起あはしつゝと軒のきの一本いっぴんのさうり過すまたるとあが
ちてあはれ雪ゆきとどあつとあましと打うち吟ぎんぐ、板い敷こふ腰こし
かけぬころ、其その歩あゆへ十八じゅうはちむらう見みゆる娘むすめの上うへふいふは威おどろ
光ひかり茶ちやふて山やま吹ふぞ、島しま原はらづけふぬひつらと著きて頭かぶもふぎや
加かふ飾かざりも、端はな手てあふりのら品ひんよく優やさしげさるるぶあちら
きころあしどろふて醜みにくらぬ下げ女なふ包かもりこせて紫むら
の中なか着きての襟えりかきあはせつゝ入い来きるさるる花はなも面おもてをか
く

ズ、犬いぬ二に郎らう立た出でかつとらんが、かので顔かほと背せけ見みぬ
あつて八や重へふ白はくへる九く重じゅうの木こ末すえくせあがやうあひと
ふ谷やの老らう樹じゆのええあきと、今いま頃ころ何なにとて見みよ、来きつらん
あまなるとりれて眼うらみしきどろ、とくみ雪ゆきとむらら
まし物ものととくみ稀まれある人ひととまらち得えつるものつとあき
櫻さくらもあるあかとかあちらげん女むすめつや入いて、近ちかく坐ます
あまなるとりて眼うらみしきとららむらむらとあまなると
るへる人の心こころれ様さまを女むすめららるる色いろあるう入い風ふう雅みやびと

わら風流とやらの風の字ふ岸北柳心池の藤むこま
こが方へ靡くせて人のまことあぬ姥姥をばりや涙の雨
雲へ隔つる心の霞とともふ拂りんとせぬおけきと生
げし此頃の玉章をどよよとくらしと笑草ふをひ
久ん悪きまのと加へは實まあとの情あきあ方へ去年の
まゝあどとあく返すて今宵まのぼと契と置き
其あいの夜もあさるても何のまのりも音もかく二
夜も二夜もろど口の番させをとも果其風雅とやらの

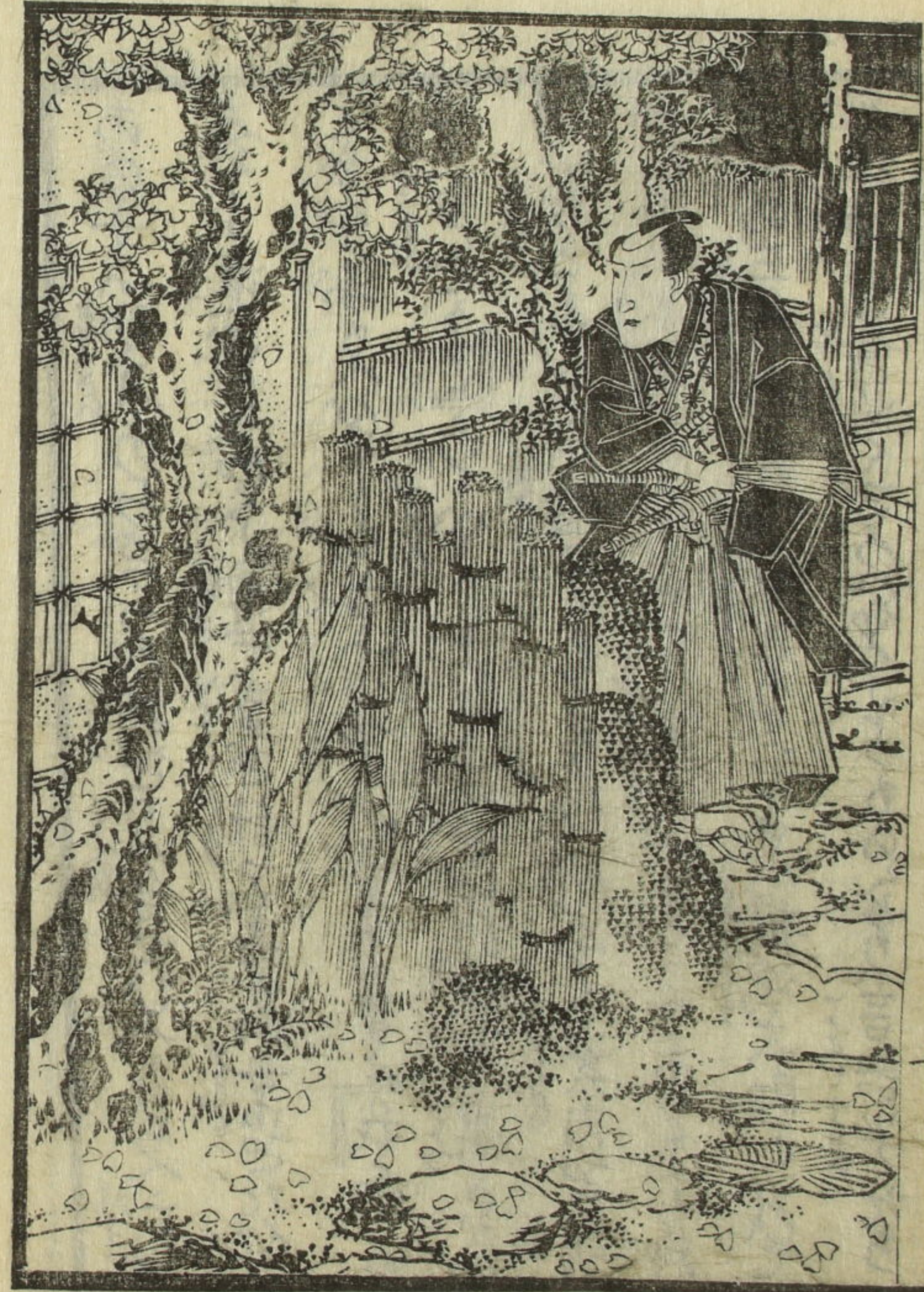
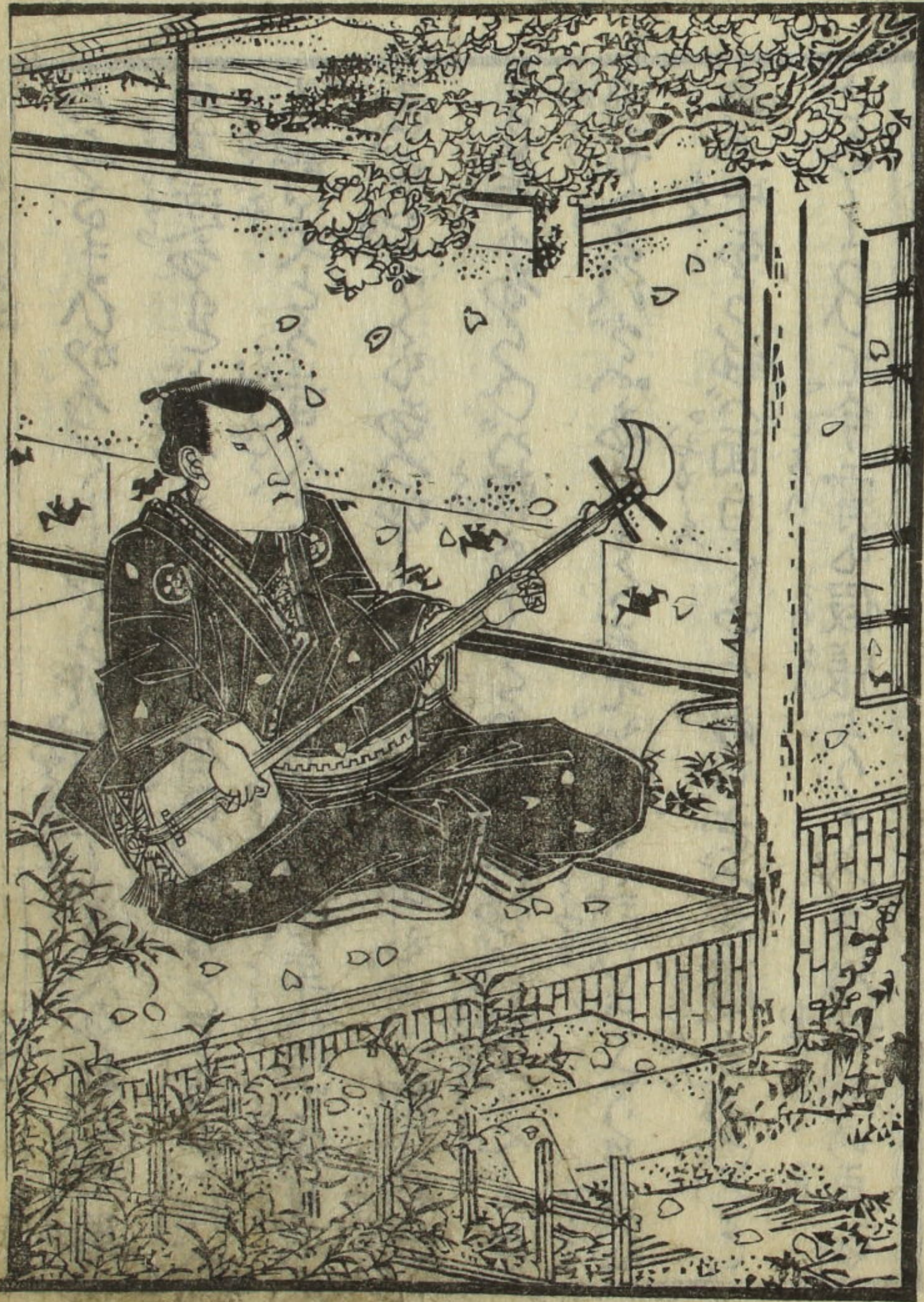
風の字れ。風とひくを薬ののまをからき目の上ふ妙さ目
こせ今年ふあつてふか羊玉の雪踏の草の破じのまを
御文使で二里の道来る度と毎ふしつてもあふすさうして
今まこむりぐらり。つらぐ悪うて暖かると下女も煙草
で畳をつく男ふあつと打まひ今日吉田の社へや詣りひ
し。真如堂あど此頃の古支あどふぎとふべしといへる
うらむあさるくやうふ半時とふさせも人今日へ大古又れ
こめてまあつぬらして浅ましく真さめくも古又ふあんと

いひて懐へ顔さへ入る下女のふだんあつた由二人の呑ふ
 て八九分加の方へ縁組定り最早結納とむいふと
 志すまはるる故よきとちと出り力と添へて此相談
 破るやうふあて申らんを願ひ奉りよ奉れり
 といふ物子があつていふもてものりまを白歯でか
 へき吾まの程があるを父上の毒牲さかろくあ
 白髪が活らあちむせぬふの籠りてと目尻が
 まろつものまがるふあつていふはくく涙





びくき餘あまこあつて響ひびききふ花はなも散ちりぬべし其鐘かねは
 おとどろふの別わかれの床とこみきつたるは世よふもいと堪たげが
 下女げにようめ来て長ながくうらうら人影ひとがもたつちりて日ひも
 加くれぬあまりがつこのおとくありて便べん多たくと引ひき
 けて娘むすめと伴ともひ出でせきなりあの娘むすめはお文あやとて藤波ふじなみ角かく
 といふ醫師いしやの娘むすめあつたり犬いぬ二に即すなはち手洗てあらひせうりが
 とき衣ころも紋もんかひ利りひつそく近ちかう出いでてつとくと守まもりぞ
 ふお文あやが顔かほ目前まへふらえて餘波あまの移うつ香かのそと薫か



こと。いんぎく三ひらむらりさるし出てよまきまは鴻
 太郎意味深げふひとあて。まてふ都の春とて西も
 東もをあらぬ所あくもいりころ先ふとらん心の
 まよひしてしまご花見ふとそへ出ひはるあられごめりふ
 へふを祇園清水の邊ごとを徜徉しつ花ごうのあらは
 何むく。田舎人の目ころふ心肝むらせてあきるむ
 うるとをまふ風流ふのふぎやうふむけとらんふも
 べく。きまご鮮魚の不自由あや。鼓とりあもの薄

きあとしちやうと。あある申様をら。秋の風や立
 頃ハ故郷の菜汁。やせめて吸まほく。鱧の鱈と官
 爵ふかりんむむらとりのわと申さる。いながら給物の話
 申つ。飯も奉らぬ。話あつて。物食ふまのまじれ
 ころあり。さいえひ塩鯛の水漬置つ壬生米あしり
 ひて煮はん。都あつふあて。庵丁のゆきこころいふ
 あらぬ。といひて勝手ふく湯候来つと告れ。さる
 かくあまご。先生とあ。壺より茶うりなまて。



庭へ鍋とりふあさむべ返すも今こそ手紙めくるといふ人あ
 へ藤波氏の使う詠草と見えたり。明後日までふえ
 てかへつゝとひひてかへやり。さこそその綴る狂哥れ
 詠草と又鴻太郎が前ふらきあめれ早鍋ふ油い
 して火鉢ふかけて鯛煮く。さそち〜んせつ。この哥
 よ藤波一角といふ醫師が〜か〜拙き哥ももあつ題
 立春

大晦日令〜層蘇を引揚て井戸の中より春なりふり

春ころの腹へ立ちよ元日はあつひたきとせりし福来ん
 今このころの地口縁の語も〜好ま流あ〜〜品のよき
 趣向あつら〜とつるがよきも〜〜とふあつら
 幸ならぬあつらむき〜〜〜の哥あつら祈悪
 君よ一夜あつら〜〜〜安柱枝は〜神もあつらとて流
 根皮と願への秀句もき〜〜〜ととまれば何ぞ〜
 と腹を抱へて笑ふ鴻太郎。その藤波氏といふ〜〜〜
 知人ふらよき娘のいろ〜〜〜〜の懇意あつら〜と社

一、い、わ、が、も、の、野、と、あ、と、あ、ら、は、の、あ、れ、の、こ、や
た、ま、の、福、が、悪、の、四、角、四、面、の、堅、蔵、が、此、支、加、き、顔、を
見、て、は、け、て、も、無、造、作、を、頼、り、加、ま、さ、る、た
の、中、へ、お、ち、の、強、き、の、こ、歎、息、の、や、を、加、ま、さ
れ、も、あ、断、り、と、筆、を、り、て、り、あ、く、先、承、知、の、旨
返、夏、し、て、人、さ、ら、び、び、此、贈、物、請、ら、せ、と、欲、が、こ
つ、ら、く、書、の、面、を、く、ら、く、加、へ、く、讀、見、て、あ、心、得、ぬ

夏、と、不、審、み、さ、て、さ、ら、く、や、と、笑、ひ、ゆ、と、あ、の、一、つ、き、夏
あ、と、出、来、ふ、り、と、悦、び、て、返、書、加、き、使、ふ、ら、ん、と、い、は、ら、し、み
吉、左、右、つ、げ、奉、ら、ん、沛、禮、の、拜、顔、ひ、こ、と、こ、つ、て、よ、
何、も、肴、な、り、れ、ど、も、酒、の、こ、と、め、り、と、福、と、加
戀、の、闇、路
水、橋、鴻、太、郎、の、尾、張、國、海、士、部、郡、小、佐、佐、篤、目、正、一、家
と、こ、も、入、る、郷、士、ふ、て、生、平、の、五、樂、何、ひ、と、ろ、か、け、る
夏、も、あ、き、福、人、あ、ら、り、た、が、あ、ら、ぬ、夏、の、父、母、ふ、え、や、く

別とてふとありたるか、加ては、叔母あり人小養育
 せらとけりとの叔母、今別み住すこと万せりて鴻
 太郎既ふたおほく越りて婚姻の言を勸めし心ふ
 叶ふ者あるとたり、此度友達と近江の多賀へ詣り序
 鴻太郎の都見物せんとて、友達別とて上京しりる
 家と出る時、叔母のいひりるやう多賀より程近けり、
 都にて加へ、京の川の女と殊ふ勝れてよき事と
 きく、所からあると、おと兼する女も多加べし、其中ふ

ハかあとの意ふ合るもあべし。何とぞあてよ、定めよ。
 といひ、れがその心を、ふもひのほど、お親の志ひて、ら
 ば、操正しく内とよく、奔へ、お人女あを、見あてま
 ほへ、この都も稀み、いん見て、とえお、きく、おま
 あ、いり、つら、あ、が、こ、り、ま、ど、得、ん、と、甚、難、く、適、徳、の、
 行、よ、い、あ、ど、い、ふ、ふ、多、く、名、聞、の、為、ふ、ま、る、え、せ、の、の、
 又、世、と、ま、り、て、佛、お、ぶ、り、し、物、識、顔、ま、り、ひ、ご、の、有、
 の、あ、ま、い、人、を、擇、ぶ、の、容、易、か、ら、ぬ、業、ふ、ひ、と、あ、く、ふ、あ、

精しく擇ばんとのミセバ一生獨身ふて過るより外も
 むるべくな大かこよしと申の女あらば神ふとひト方
 あて定め縁と神佛の御心ふ任さるあて上策あらぬ
 心得とらんと詞の餞せしとささる夏ふあひて今も
 さとさびあかふ此度とごろふ藤波一角が娘と乞を
 夏ゆふふとのふふかの顔赤くしてさふもひつぐとゆひ
 日清水あてお文ぞ見つお文のその日やうて犬二郎が
 許へ行へんと人ふ怪しむらととて順路をればまづ

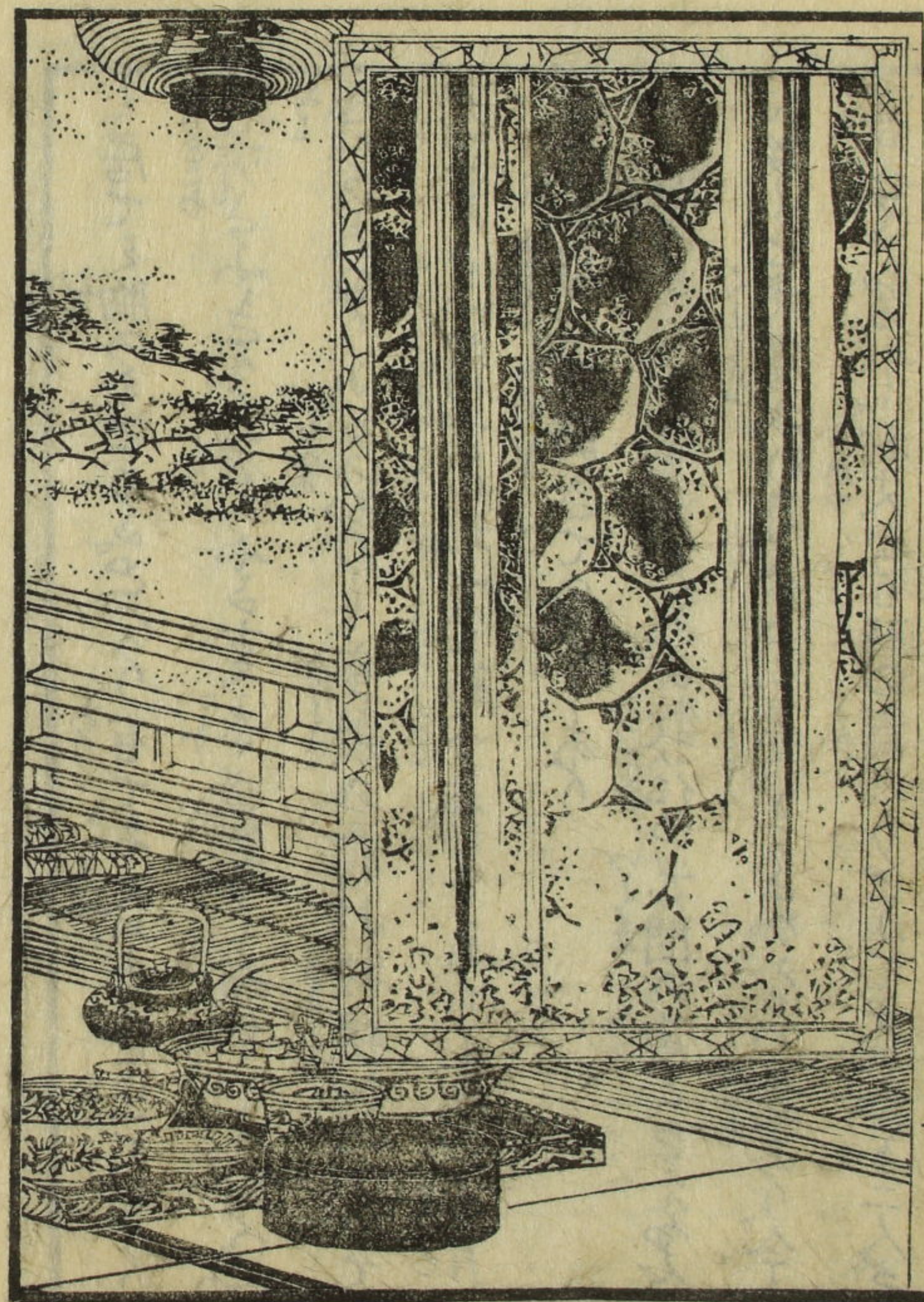
清水へ詰かてらか忍びての花見と名とくはまば伴あふ
 人あて心あての下女と阿房の小者とどのこつとて祓と
 出たりさても飾ふふあら祐と身ふ餘計の艶色あ
 けて照透てたまなもきまて兼くきのこあらびらうかき
 生れあまは都未通女の各の袖錦のこもとかつらひて
 櫻の木うげふ立並ひつととらうまららんとあまはき
 加へ中ぞ耻さけさもあくああかふも見えはあま
 行さま又一あはきわたちてとや此清水の花盛る

東山第一の繁華へ都人田舎人彼此ふ圓居して雅
 るささびつる。観音へ佛ふあらまどとうらうらう宗阿のり
 てもこちん東山と貞柳の出らひらるるべくうかま女の手
 ぞひく宗盛坊主階士の櫻姫ももおほく地王の櫻
 ふ幕うち廻くあど木遣り哥唄ふちちうあろ下向せ
 し伊勢カ道中の余波あるべく松風や音羽の瀧のきよ
 氷水も結べて愛あふく順禮も見や大うこハ醉翁が
 楽花ふあらび酒と色とふよつぎのゆるも知らぬ

七ぞどり騒ぐあふべく。鴻太郎あらうも思ひいふ
 遙ふまささる佳氣紅塵小眼くらむあさく七あふ
 とらんぞ足も地ふつる本堂より中門の方へ出行る
 ぞ刀の璫物ふつとあたる驚き顧まが後より來るかの
 か文が帯より腰の邊へかけが突當つる顔と顔と
 こそあ計をまご互小身と避つ目近く見ぬはあ文
 あまのふ美くけまへ鴻太郎胸のまごどりて詞もえ
 出さびあ文はらうらふ如く笑はぬ如くもてまごり

小て行過ぬあま美しとさるふいふせん足あつらう向か
 文あまふつきて行くふいふせん田村堂の繪あて入加げ
 みあつて見失ひぬ回影のま前み獲もあよりやあまの
 あままもむくと目を閉て益良雄心振起し美色の針を
 刃とる火坑とさるも壁へ哲婦の城と傾くとも災へ婦人
 より發るともいひ色小滴とて徳と昏ませし例常又
 小の説諭し誠神と迷へば悪すひと好まば故郷と出く時
 才貞と輕しや其屑の乾ぬ間ふかむ心のつた天都

の名所やぐらんかどふい恋の奴とあり果べあま拙の我
 心と情慾とつらく壓せば少く胸とすれども猶物足
 らぬあちしけり祇園の神社はる産碓の沖神と同躰
 ちと未詰ごうしあそおとまらるもいせ今より西き
 て心のまときもあせんそあまをえめてあまを出ぬく
 て下河原小のうり鳥居の内へ入るとまると時百度石の
 傍とや女のうちうりまごころかの少女小違ひはあふとも
 いろふちあひつるあまて再加へるまびとそき廣前ふい



和風 11

五

中と断れど、あめあわれれ如く、身も消なぐとの意、よ
と入たる哥ありり、昔春と錯へん、夏と惜、心ありて
表情と訴るやう、ふあ、と、か、く、心、の、迷、ち、る、べ、く、鴻、太、郎
あま、い、ひ、ふ、此、宮、居、へ、き、こ、ま、は、く、煩、惱、の、雲、ふ、覆、れ、是
ま、毛、橋、西、施、と、見、や、る、艶、色、ふ、近、き、て、も、あ、あ、う、う、と、
と、見、る、の、と、あ、て、懸、念、心、は、ら、ふ、あ、ら、う、と、し、せ、か、く、と、う、と、か、く、
る、人、の、恋、し、き、り、必、神、の、結、び、お、き、引、よ、せ、た、ふ、赤、繩、あ、る、あ、る
べ、あ、あ、ら、ち、ふ、思、ひ、た、え、ん、と、せ、は、か、く、と、て、天、意、ふ、成、る、あ

心きり二

二

らんもえくらびと、今へ猛き心むらせつ、茫然やうと立
てり、此扇我物ふせむは、く、く、と、き、は、く、ふ、儒、者、か、き、と
て、人、の、物、盗、む、や、う、ふ、あ、り、な、れ、て、心、ま、ら、ら、ひ、ば、茶、屋、の、ま、ま
預、け、此、女、の、あ、り、野、と、と、五、条、あ、ら、う、ふ、住、て、藤、波、某、の
娘、と、あ、ら、う、さ、ら、う、と、国、ふ、藤、波、某、の、家、あ、ら、う、と、其、親
族、ふ、ら、や、あ、ら、う、い、や、あ、ら、う、と、う、か、ば、ま、て、妻、ふ、の、こ、ん、女、の
あ、ら、う、あ、ら、う、外、ふ、あ、ら、う、あ、ら、う、れ、あ、ら、う、と、い、ひ、占、方、の、と、い、ま
し、と、菊、水、の、あ、ら、う、あ、ら、う、賣、卜、先、生、の、家、ふ、入、と、こ、い、と

べし。とらむたのり。風流の才子ふあらざれば。穴
 階と鎖と垣と越え。朧月夜ふ細殿を窺ひ。春宮の御
 前ふ猫やあふむ。のたのころごハ思ひもかけぬ。手
 短く。前条ふまゝのせる如く。犬二郎ふ媒や。この妻ふ
 めらんとはあはる。こゝろ

常盤若色香二畢

